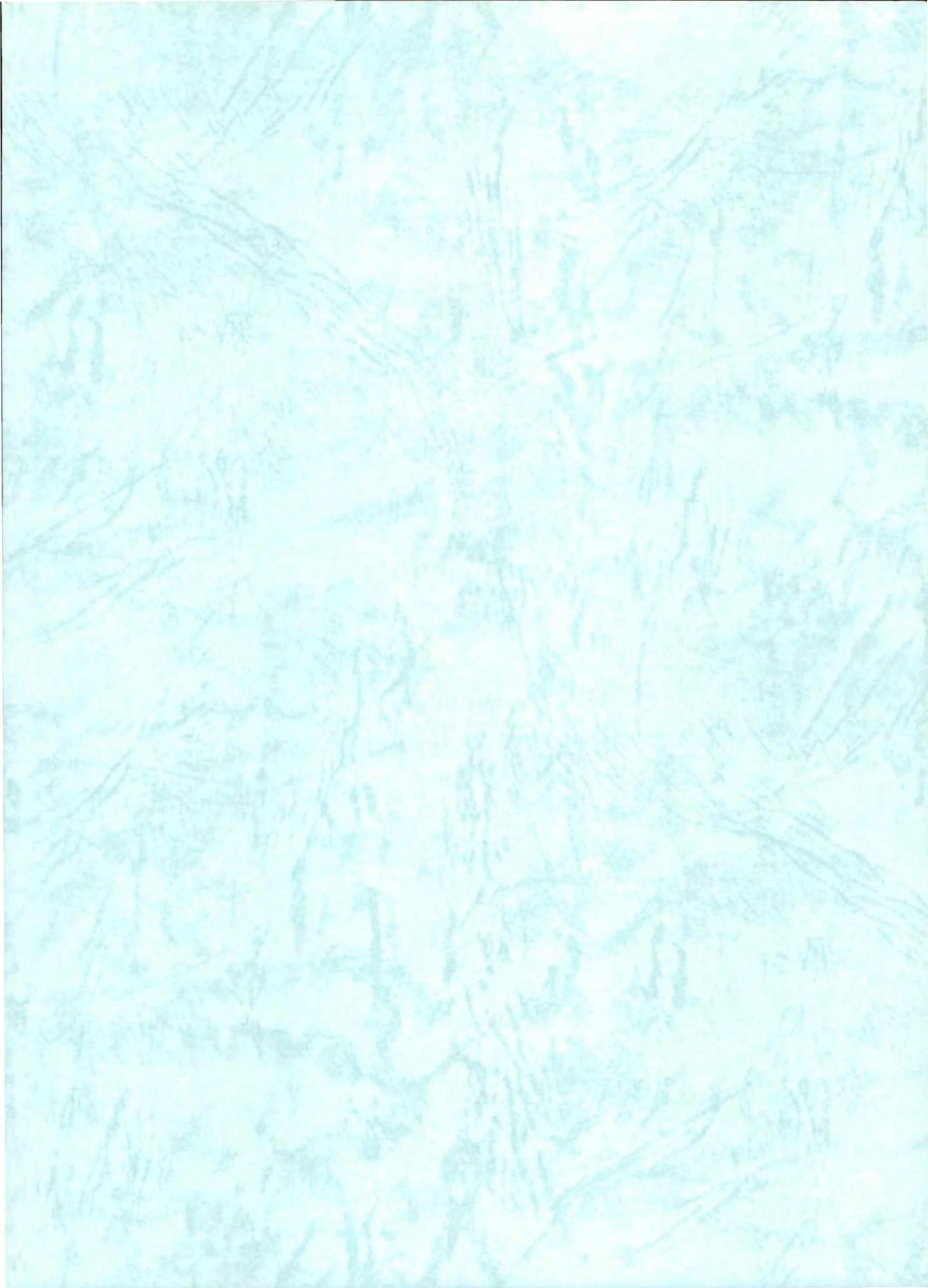


三珠町の文化財

文化と青空のまち歌舞伎のふるさと三珠町

三珠町教育委員会





ミスミソウ

芦川溪谷に雪どけの水が瀬音をたてはじめる頃、春をまちかねたように落葉の中から頭を出して咲く白い可憐な花。

(昭和49年12月26日 県の自然記念物に指定)

再刊によせて

恵まれた風土を舞台として繰り上げられた先人達の歩みは、嘗てからの由緒ある大塚古墳群と、そしていま上野遺跡・一条氏館跡遺跡として私達の前に登場し、日に日にその全貌を明らかにしつつある。

森鷗外は「過去の生活は食ってしまった飯のようなものである。飯が消化されて生きた汁になって、それから先の生活の土台になるとおりには、過去の生活は現代の生活の本になっている」と言っている。

まさに私達の生活は先人達の残した文化遺産がその元である。私達はこの文化遺産をしかと保護し、その価値を国民共有のものとしながら、その保存と活用に努めなければならぬ。

この度、既刊の「三珠町の文化財」に幾つかの文化財を加えて再刊の運びになった。これが地域に根ざした三珠教育の後ろ盾として学校教育や社会教育に大いに活かされ郷土文化の伝承と、人間形成に広く活用されんことを切望するものである。

県指定文化財



表門神社の石鳥居

表門神社の石鳥居

この鳥居は春日型で全体の構成が直線的に作られ、反りの少ない笠木、島木の両端は垂直に切られている基礎上に建てられ、一見転びの認められない太い円柱は、双方とも中辺で接合され、その幅柱真々二・五七メートルに対し、鳥居の総高二・六四メートルという、全く後世の造建とは解されない背の低い安定感に富んだ造構である。

柱上に台輪を添えた点、春日鳥居としては規格外であるが、その他にも楔を欠くなど新しい要素が僅かながら混在する。

元来台輪は柱の上部から侵される腐食防止のためであったが、それを必要としない石造では、この様式の残存がたまたま、柱と島木との調和保持の用へと転移したのであろう。

この雄大な木割幅に対する背の低いこと、直立に近い柱、島木笠木の先端の切り方など一種の風格を存した逸作で造建は鎌倉時代、材は安山岩である。

一 瀬桑の親株

赤木 根周り 九八センチ 地上三六センチの部位で二枝となり、北側の一枝はその幹囲四二センチ 南側の一枝は幹囲四三センチでその樹高は約四メートルである。

青木 南側のものは根開り六六センチ 地上六八センチの位置にこぶがあり、その部位での幹囲は六二センチ 高さは約三メートル五〇センチである。

北側のものは地上五五センチでの幹囲が八八センチその上部に



一 瀬 桑 (赤木)



一 瀬 桑 (青木)

て幹囲四〇センチ大の三枝に分かれている。樹高は約四メートルである。

一ノ瀬桑の由来

明治三十一年ごろ旧上野村川浦の一瀬益吉が、中巨摩郡田富村(旧忍村)の桑苗業者から購入した桑苗(品種鼠返し)のうちから、本来の鼠返しとは異った性状良好なる固体を発見し、これを原苗とした。代出苗を繁殖母体として自己の桑園を造成するとともに村内と近村にも配布した。

大正五年に行われた、西八代郡農会主催第一回桑園品評会に一瀬氏の桑園が桑の収量、葉質ともに抜群であることが認められ、さらに同年の大日本蚕糸会山梨支会主催「第三回蚕糸品評会」においても、優等賞が下賜され養蚕界の注目を浴びるに至った。

一瀬氏によって選出されたこの桑苗に性状がいく分異なる二つの種類があった。

一つは条(枝)の伸長が稍長く、古条(秋期落葉後の枝)が青い灰色を帯び、他の一つは条長が短かい半面、葉の着生が密で、古条の色は赤味を帯びている。

このことから前者を白鼠、後者を赤鼠と呼んでいたが、後に「一瀬桑」と命名されてからは、白鼠を一瀬の青木、赤鼠を赤木と呼び変えられることになった。

「一ノ瀬」の命名は選出者の一瀬の姓をそのまま冠したものであり、全国的に普及されるに至って、農林省は全国の共通名を「一ノ瀬」とすることに統一したが、本県では前記の蚕糸品評会のさい「一瀬桑」として出品されたことから現在においても「一瀬桑」と呼ばれている。



薬王寺のオハツキ
イチヨウの雄株

薬王寺のオハツキ イチヨウの雄株

山梨はオハツキイチヨウの宝庫であり、葉上に種子をつける雌株は八本ほど見つかっていて、そのうち身延町下山の上沢寺のオハツキイチヨウは明治二十四年七月、白井光太郎博士によって葉上に種子のできる事実をこの木によって発見され、学界に紹介された木で、その隣の本国寺のオハツキイチヨウとともに昭和四年四月、国指定の天然記念物に指定された。

葉上に葯をつけるオハツキイチヨウの雄株は、同町上八木沢（前記上沢寺の富士川の対岸）の山神社の境内にあり、明治二十九年四月十七日、藤井健次郎博士によって発見され、これも珍奇なものとして広く欧米の学界に紹介され、昭和十五年七月国の天然記念物に指定された。オハツキイチヨウの雄株で指定されたものはこの木だけである。

ここ薬王寺にあるオハツキイチヨウの雄株は、山神社の境内にある木について二番目に発見された木である。発見者は三珠町誌の編集にたずさわっていた山梨植物同好会々長の秋山樹好先生で、発見当時（昭和五十一年）の「植物採集ニュース」にも掲載された。

この木は寺の境内の南西側にあり、根本の周囲四メートル一〇センチ、目通り幹囲三メートル七〇センチ、枝張り東七メートル、西九メートル、南六メートル、北六メートル五〇センチ、樹高一六メートルでかなりの大木である。葯の数が多い葉ほど変形が著しく、葉も小さくなる。また葯をつけた葉は一枚一枚落ちるのではなく、葉と雄花と葯をつけた葉とが叢生したまま落ちてくるのである。



コツブガヤ

表門神社のコツブガヤ

根廻り三・一メートル、樹高約一九・五メートル、目通り幹囲二・二メートル、枝下三・五メートル、枝張は東六・六メートル、西六・三メートル、南七・六メートル、北五・四メートルである。

この特色は枝条が密生、葉は短小で先端は鈍で母種（基本種）ほど鋭くない。最大の特徴は「コツブガヤ」と同定される重要な決めてとなる種子が極めて少ない点にある。下幹部の南側に多少の腐れはあるが、樹勢はすこぶる旺盛で、またよく実をつける。



大塚古墳

大塚古墳

三珠町大塚、北原古墳群中の一基。前方後円墳であるが、帆立貝式古墳とみなされることもある。周囲を削平されているが、現状では全長四〇メートル、後円部径三五メートルで、後円部の高さは五メートルである。

前方部石室より鈴釧、六鈴鏡、短甲、挂甲小札類、直刀、小札類、鉄鏃などの副葬品が発見された。また、後円部においても竪穴式石室が存在することが確認されている。

前方部の石室は全長三メートル、幅〇、八メートル程で、床面には赤彩された小石が敷かれている。

通常、前方後円墳では後円部に石室が築かれるが、本古墳のように前方部にも石室が築かれる例は珍しい。

墳丘からは葺石、円筒埴輪、土師器、須恵器が発見されている。

墳丘周辺の畑での試掘調査によって周溝の一部が発見されているが、これによれば本来の全長は五〇メートルを超えるのではないかと思われる。



鈴釧・六鈴鏡

大塚古墳出土資料一括七三九点

鈴釧 本体長径一四、六センチ 短径一一、五センチ 内径七、六七
センチ×五センチ

六鈴鏡 径一一、四五センチ 鈴径一、九五センチ

桂甲 長さ七センチ弱 幅三センチ弱のものが多し

短甲 高 前胴高三三センチ 後胴高四一センチ

幅 前胴押付板部二九センチ 後胴押付板部四八センチ

直刀 すべて欠損品 最低五振 身幅は約四センチ

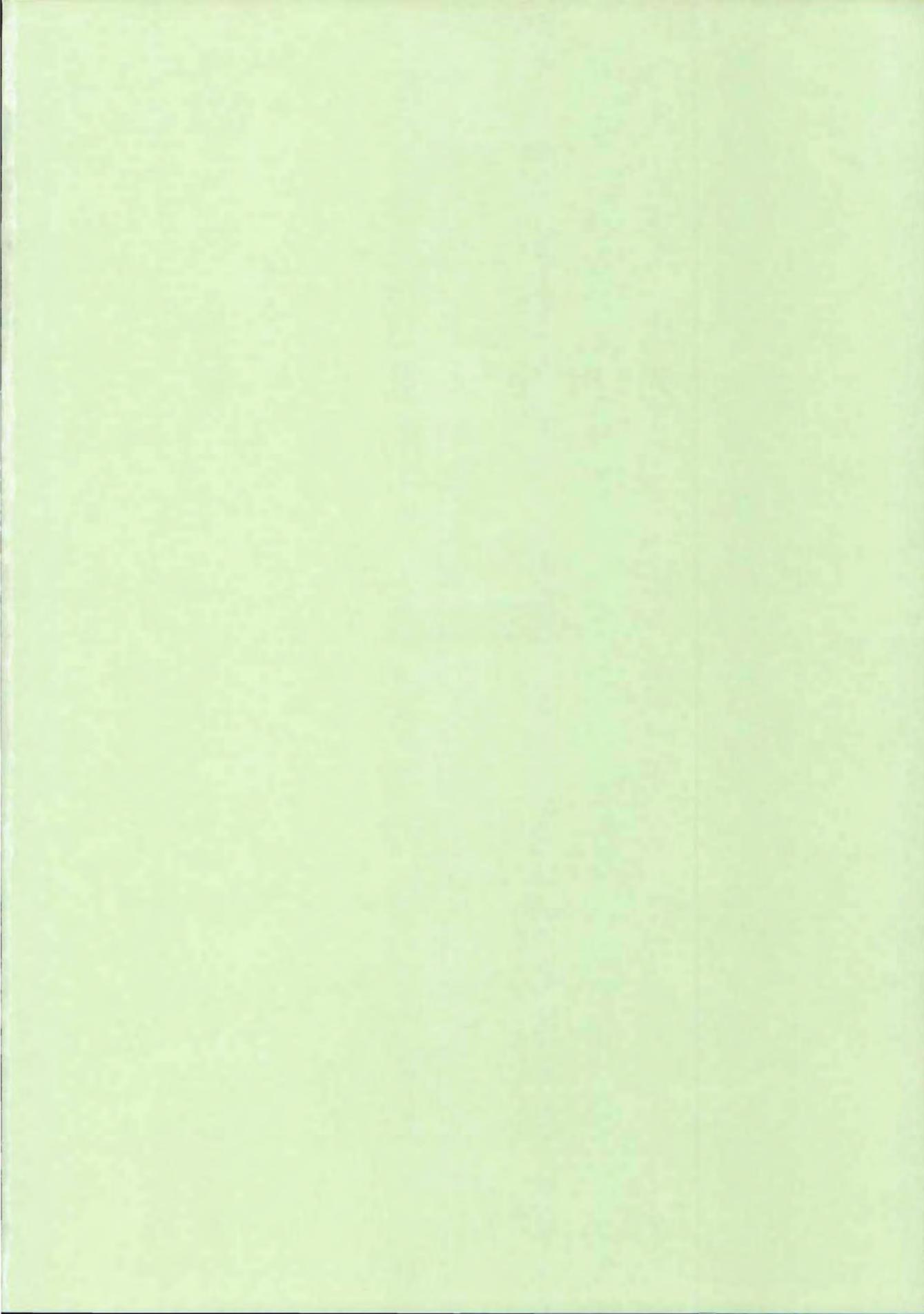
馬具 鉄製楯円鏡板付き轡の破片

鉄鏃 玉類 埴輪 土師器 須恵器

大塚古墳は、三珠町大塚北区北原に所在する前方後円墳である。かつて、鏡、刀剣が出土したことが知られているが、それらは現在所在が不明である。前方部から発掘された遺物は、耕作時に発見された六鈴鏡、直刀を含め、石室内に遺存していたものと思われる。

この出土品において注目すべきことは、甲冑、刀剣などに見られる軍事的要素と鈴釧、六鈴鏡に見られる呪術的要素が併存している点である。なお、本古墳の年代は五世紀末あるいは六世紀初頭と考えられる。

町指定文化財





表門神社（神楽殿）



表門神社（本 殿）

表 門 神 社

表門神社は、御崎神社あるいは市川文珠とも称され、延喜式内社で由緒ある神社である。祭神は天照大神、倉稲魂命、瓊々杵命の三神である。

〔本 殿〕

「甲斐国志」には、永保年間（一〇八一―一四）を初めとして数回の造営記録があるが、現在の建物は棟札によって元禄八年（一六九五）の建立であることがはっきりしている。

本殿は三間社流れ造りで、今は銅板で覆われているが当初は檜皮葺きである。臺股・脇障子・手狭等に獅子・鶴・鳳凰等の動物の彫刻が精巧に施されたうえ彩色がなされ、正面扉には金箔が貼られている。

棟札には大工とうりよう、石川久左衛門家久わき大工同五郎左衛門重良と記されており、下山大工の作であることが知られる。

文化十五年（一一八一）に屋根替が行なわれているが、他に大きな改変部分はなく、当初の形態をよく残した江戸中期を代表する建造物である。

〔神楽殿〕

本殿と同じく元禄八年の造立である。この時に今も残る拝殿・随神門・鳥居も一緒に建てられており、境内の景観を一新したものと思われる。

正面一間、側面一間、切妻造檜皮葺（現在銅板葺）のこの建物は木鼻の湯紋や形態をみると本殿と同一であり、同時期の建物であることがはっきりわかる。

毎年二月第一日曜日（以前は二月第一の西の日）の例祭には、この神楽殿で約九〇年前から受け継がれている。町指定文化財「太々神楽」が奉納される。



八ノ宮御座所

「葉王寺」

後陽成院第八ノ宮良純親王御座所

葉王寺は天平十八年（七四六）聖武天皇の詔勅により、行基が開き観全僧都の開山になる名刹である。

当寺の客殿の上段の間には、八之宮良純親王御座所（御座の間）の一部が保存されている。親王は、後陽成天皇の第八皇子で十八歳で得度仏門に入り京都知恩院の門跡となったが、寛永二十年（一六四三）十二月事情あつて甲斐に流され、興因寺（甲府市）に十二年間、続いて明暦元年（一六五五）に当寺にうつり五年間住んだ後、万治二年（一六五九）六月許されて京都に帰り、寛文九年（一六六九）六十六歳で没した。

当寺はその後焼失したが享保二年（一七一九）に再建にかかっている。そのなかで親王の遺跡を保存するため御座の間（親王が居住した一部）を客殿のそばに移築し享保九年（一七二六）に完成したことが袋戸棚の裏面に当山十九世（桓籠）によって記録されている。

御座の間は客殿の上段の間（通称宮さん座敷）から東側に床を一段高くして移築してある。御座の間は方一間二畳敷で、天井には直径一メートルの十二弁の菊花紋がかたどられている。上段の間とは御翠簾で仕切られていておもむきがある。また、知恩院門跡尊超法親王の筆になる「儼然」の額が揚げられていて落ち付きがあり、気品が感じられ往時をしのぶにふさわしいものである。

親王が、使用した品々の多くは、帰京の折持ち帰ったが、京についてから供の者をとおして当寺へ下げ渡しになった物が何品もある。現存する物は、町指定文化財「硯」をはじめ見台、脇息、網焼物菓子器、丁子風呂呂（香をたきこめる道具）等が保存され親王をしのぶよすがとなっている。



南村の宝篋印塔



光勝寺の仁王門

光勝寺の仁王門

仁王門は、梁行二間、桁行三間半の茅葺木造建築である。一間半の参道をはさみ、左右に仁王尊（金剛力士像）が一体づつ安置されている。

金剛力士像は、木造の寄木造立像で、身体赤色、上半身裸の力上が肘を張り、腕に力を漲らせ、衣装をなびかせ、怒った眼光と盛り上がる筋肉が降々として写真の妙を示している。

右側は阿像（開口）木造の寄木造立像で像高は二一四センチ、右手は開き伏せ、左手は三股杵を振り上げ、顔は右側を向いている。

左側は、吽像（閉口）木造の寄木造立像。像高は二二〇センチ、光背含む高さは二二八センチで、右手は肩の前で開き左手は握り伏せ、顔は左側を向いている。

南村の宝篋印塔

塔の一種で、基壇の上に方形の塔身を置き、上に宝形造りの段状の笠石（屋根）を置き、相輪を立て笠石の四隅に隅飾りの突起があるのが特徴で塔身の四面には仏菩薩を標示する梵字などを刻む種子があるのが一般的である。

この塔は現高四・二メートルに及ぶ大きなもので、天明二年九月（一七八二年）に念仏講中五十三人の発願で、惣村中が施主となって建立されたものである。

形式として通例なものではなく、大きな笠が塔身全体を覆う開いたものになっている。

塔身も首をはさみ上下二印に分かれている。また、塔身の月輪に当たる部分（種子）には梵字はなく宝篋印塔の文字が刻まれている。

菊と牡丹、蛭竜などの彫刻も美しく、全体的に調和のとれた安定感のある堂々たる塔である。



熊野神社の狛犬

熊野神社の狛犬

この神社の本殿前にある一対の石造狛犬(こまいぬ)は、前足が折れているが、これはもと那知社にあつたもので「応永十二乙酉二月一日」(一四〇五)の刻銘をもち、年号をはさんで右に「大公性見」左に「小公藤二良」と示されている。高さ一尺三寸余(四二センチ余)硬質な安山岩製、一見はなほ古風なこの狛犬は前足を前に張り、顔を正面に向けて突つ立つ東大寺式のものとは相違して、体を前方にくつと乗り出した形態はむしろ犬に近い、顔面の様子といい、極度に太い前脚といい、粗削りの感がある。しかし首に垂れ毛、尾の盛り上がった旋毛の具合などから、笑えない古拙への親しみがわく。

古い時代のもものは、その例少なく熊野神社の狛犬は、在銘遺品としては全国的にも屈指のものである。東大寺の石獅子をへだたること約三百年、この間に日本化されたというよりは、むしろ別系統と見るべく、狛犬の原始型を知る上に重要な遺物である。「大公性見」「小公藤二良」はこれを作った「大工」を「大公」と書き「小工」を「小公」としたのである。これは「石工」を「石巧」と記した天明二年の長昌院の宝匡印塔(南区)と同様であろう。木造建築に限らず、金属工芸でも、石造美術関係でも同じことであるが、製作者を「大工」といい、そのもとに「小工」があつて実際の仕事に当たつた場合が多い。

上述のごとく、狛犬の原始型であり、しかも在銘としてはわが国屈指という点後世に伝えたい逸品である。

(山梨県政六十年誌から)



千手観世音菩薩像 (中央)
 不動明王像 (右側)
 毘沙門天王像 (左側)

千手観世音菩薩像

千手観世音菩薩像は、木造の寄木造立像、像高、四六センチ、台座、蓮華座高さ四〇センチで、頭部に上面の観音像を頂き、左右に四六臂を有し、それぞれの手に仏の知恵を現わす仏具を持つ。

不動明王像

不動明王は、木造の寄木造立像千手観世音菩薩像の向かって右側に脇侍として安置してある。像高は七〇センチ、台座、光背含む、高さ一一八センチで、右手には剣、左手には羅索を持つ。

毘沙門天王像

毘沙門天王像は、木造の寄木造立像であり、千手観世音菩薩像の向かって左側に脇侍として安置してある。像高は七七センチ、台座光背含む高さ一一四センチで、右手には宝棒、左手には宝塔を持ち、足下には悪鬼を踏みつけている。



薬師瑠璃光如来像 (中央)
日光菩薩像 (右側)
月光菩薩像 (左側)



十二神将像

十二神将像

像は間口二門奥行三門の瓦ぶきであり、堂内に安置してある十二神将は十二体あるが手足に損傷があり又持ちものの武器等破損しているがほぼ完全の状態で保存されている。

薬師瑠璃光如来像

毘沙門天王像同様像は間口二門奥行三門の瓦ぶき堂内に安置してある薬師如来像は顔面の一部が損傷ある。

薬師如来像の台座の裏には、朱墨で元禄の年号と数名が今日も判読出来る。ヌメの所に行基作の銘もある。

伝説によると元禄十二年九月八日県下大洪水で神金村(現在塩山市)雲峰寺の境内の薬師堂が倒壊し洪水のため流失し旧上野村字矢作の矢作田へ流入したのを当時の人々が引き揚げ仏像の為禅昌寺に祀り現在に至ったものと伝えられている。

日光菩薩像

月光菩薩像

脇師の日光・月光菩薩に神将は江戸末期、京都の仏師より購入したと伝えられている。

日光菩薩像は、木造寄木造立像で像高七〇センチである。
月光菩薩像は、木造寄木造立像で像高七七センチである。



文珠画像

文珠画像

伝えるところによると白河天皇永保元年（一〇八二）主上が御病気で、大法秘法、典薬医術もその効なくたいへんな御なやみであった。ちよつと
そのころ市川の神主が上京中であり、洛中で占いの評判が高かったので、
御所に召し出されて、占いを申しあげ祈念すると、たちまち御病気が平癒
せられたので、叡感斜ならず、後日社頭末社に至るまで御造営下され、ま
た弘法大師作といわれる梵字で書いた文珠菩薩の画像をいただいたのであ
る。このことによつて以後この神社名が表門神社というより「おもんじ」
さんの方が一般の人たちの愛称で呼ばれることになった。

文珠は本来仏教の「文殊師利菩薩」の略称で、常に釈迦の左脇に侍して
智恵、智識を司り、右に侍する普賢菩薩といつてこれを普通釈迦三尊仏と
いうのである。このようなことから智識、学問勉強ということで庶民信仰
に発展したものである。

この画像は紺地に金泥で描かれ、線の所は梵字が書かれているが、極め
て小さい梵字であるため何経が書かれているのかわからない。

八ノ宮遺物の絵馬

絵馬

絵馬は通常、神社仏閣等に馬の絵を書いて奉納したことから名が出たも
のであるが、薬王寺の絵馬は特大のもので絵馬というよりは壁画を思わせ
るほど大きなもので、縦二・五メートル横二・五メートルもあり、雄大な
ものである。二面のうち向かつて右のものは絵がはげ落ちている。





繪 卷 物

繪 卷 物

この絵巻物は、前記八ノ宮の遺作であり、墨絵で青墨を用いて庭園の配置等を描いたものである。石の配置、池の形、その石の名は仏教の四天王を配する等、古庭園の布置を示すものである。中に書いてある文はお家流で中々読み下し難いが次のようである。

法親皇良澄安通ノ御所ニスエサセ給図、として日本式庭園の石の配置図が描いてあり、その間に

人皇八十六代後堀河の帝は守貞親王の皇子、御治世は十一年にして
 くらいをゆづらしたまひ、をなしく八十七代の皇子 四条の院みこ
 とのが、堀河先帝ハ和歌の道にみこころをよさせ給ひしによりはじ
 めて景をうつし、いしをつみ口むらさめの前庭とし給し可哉

自是

いしに おもてをつけさせ給ひ 又は三蔵石とも 五行とも 八十
 一石とも 二十八宿とも 又は七星石ともなづけ給ひ
 をくに国師のいわく、名あつてかたちなし、千返(変)万花(化)
 とのたまひぬ

良純親皇様が再び京にお帰りになったら、自分のお住居の御所安
 通院に理想の庭園をえがかれた(計画)ものと思考せられる。



大塚村絵図



徳川家の御朱印

大塚村絵図

縦一二五センチ、横一四〇センチで、貼り合せた和紙に青、黄、茶、緑、灰の五色を用いて大塚村絵図が描かれている。

折目が多少摩滅しているが、色採は鮮明で保存状況はよい。

この絵図は、塩島家に代々伝わるもので宝永五年九月に委細を吟味のうえ書き上げることが記されていることから西暦一七〇八年江戸時代中期のもので、当時の大塚村落の状況を伺い知ることができる貴重な絵図である。

御朱印状写

高萩区にある御朱印状とは、武田信玄公下付のものと、徳川家康公下付の九一色商売の一章と、徳川公が九一色衆と称する十七騎にくだされた都合三章とに、この三章の預り証の都合四枚からなっている。

武田の時代九一色郷民は山村なるによって納税をしない御伝馬役を仰せつかった。信玄の時代となり隣接の諸国に遠征がしげくなるにつれ、御伝馬役の九一色郷民は常に馬をもって兵站線の確保に当たっていたことが実に苦痛であった。

天正五年正月早々、駿河の今川家の家臣久島弥太郎が小曲村で事を構えたので、命によって高萩の地頭内藤肥前守が九一色の郷民を召集し、正月二日桜峠に出陣、弥太郎これに恐れをなし逃げるところを追撃、翌三日富竹河原に追い詰め高萩村の渡辺甚右衛門これを打ち取ったので信玄の御感不斜ならず、翌二月二十日高萩村高（光）源院へ御入り遊ばされ、御褒美としてなんなりとも望むものをとのことに、先年御下し置かれ候無納の御墨付を差し上げ奉り、百姓相続出来るように御願ひ申し上げたところ、引き替えに諸役御免許の御朱印を頂戴仕ると、すなわち武田家の御朱印である。



武田家の御朱印

次は天正十年三月武田家滅亡により、徳川家康は甲州治定のため二回目の入国を、同年六月九日駿州根原村より本栖、精進と来たが、大風雨のため精進に滞留、十二日雨も漸く収まったので九一色衆十七騎の者ども百姓を督励して橋や道路を修復し、わずか二里の山坂を漸く昼頃古閑村の吉祥寺で昼食をとり、阿難坂を越え夕暮れに上菅根竜華院にお泊まりになった。

この時の労を賞して御褒美として、なんなりとも所望せよとのおうせに、実は信玄公より下しおかれた御朱印を御覧に入れたところ「諸商売役免許」の御朱印を下し置かれあり難く云々、と

その後この朱印については、本栖の地頭渡辺囚獄佐(ひとやのすけ)の申すに、「この御朱印は民家に預け置くは恐れ多い故、我等方に預け置くよ」に」とのこと、寛永十八年囚獄佐に預けその代償として「諸商売役免許」の鑑札を渡したのは天和二年(天正十年を去る百年後)代官平岡治郎右衛門が赴任してからである。

次に右御朱印は民間において恐れ多いというので、地頭渡辺囚獄佐が預ったが、囚獄佐のちに江戸に転勤して持ち去ったので、九一郷の代表者が下げ渡しを陳情に行ったが下げ渡されず、かえって没収された形となり、その預り証が交付されたその写しとともに高萩の宝蔵に在ったものを、明治三十八年ここに役場を移す時、高萩区が接收し今日に至っている。



考古資料



八ノ宮遺品の硯

八ノ宮遺品の硯

八ノ宮の遺品には、脇息、茶碗、菓子器、硯、等数多い品が残されている。中でも町指定の硯は、硯の海の向うに唐犬が浮きぼりに彫刻してあり硯全体が巻もののようなそりをもっており、色は幾分茶褐色を帯びている

考古資料

歌舞伎文化公園内の民族資料館がある。

ここに収められている資料は縄文、弥生、古墳の各時代のもので、これらの時代の生活文化のあとを示す土器や石器、古墳の副葬品が集められており、ことに弥生から土師器の資料は系統的に豊富に集まっている。

狩猟時代から原始農耕時代へと、古代文化の中心地をなした大塚地区を物語る豊富な資料館である。

石器類は石斧（打製 磨製）石皿、凹石、石棒、石匙、石鏃、多凹石などである。また土器については縄文期の加曾利E式土器のほぼ完全なものを始めとして、主として中期、後期の破片を多数収めている。弥生時代の土器は完全なものも多く、初期、中期、後期のものが数十点収められている。また土師器、須恵器も完全な形で、数点が収められている。その他、弥生住居跡出土の炭化米や、古墳より出土の副葬品である直刀、馬具など、特筆すべきものがある。



内藤肥前守の墓

内藤肥前守の墓

内藤家は代々武田家に仕え、肥前守の父は俗称外記、先に昌資に作る、武田信虎公より一字を拝領して相模守虎資という。虎資の男内藤肥前守雅明武田家より九一色の守護を任せられ高萩に住す。現在地頭屋敷残る、法号は自観院性室宗見居士、弘治四年九月朔日卒去

肥前守に三男五女あり

男内藤孫三郎雅綱 肥前守を襲名光源院開基

内藤織部正昌行 後幕府に仕へ三百石扶持

内藤孫五郎義昌 笠村に住居

女 武田信虎 妻 一男三女あり 内藤 服という

武田六郎信基 室天折

穴山伊豆信友室 梅雪の母也

称津美濃守元直室 宮内信政ノ母

内藤修理亮昌豊 室



伊勢塚古墳



エモン塚古墳

伊勢塚古墳

三珠町大塚、北原古墳群中の一基で、大塚地区の古墳群中もつともよく原型を残して、一般からも親しまれているのがこの伊勢塚である。基底は径三メートル、高さ八メートル、頂点の径一四メートルである。頂点には伊勢大神を祀る石祠があり塚の名称の由来となっている。封土上には数本の太木があったがすべて伐採され、今は草地となっている。

一説には江戸末期に発掘を試みたが、崇りを恐れて原形に復し石祠を建立したといわれている。

エモン塚古墳

三珠町大塚、道林古墳群の内の一基で、道林部落の南方丘上にあつて、北側に押出川の溪流があり、自然の地形を利用した前方後円墳である。

墳丘は松林となっており稲荷の小石祠がある。昭和初期の土木工事により、前方部はすべて失われた模様である。主軸の方向は東西と推定され、封土を切り取った高さは約七メートルばかりで、この部分より大形の「かめ」を発掘したといわれている。

道林古墳群中、封土を残す唯一の古墳である。エモン塚の名称は近くに一条林があり武田の一族、一条右衛門大夫信竜に由来するものと思われる。



狐 塚



住 居 跡

狐 塚

三珠町大塚、田見堂及鳥居原古墳群（上ノ原）の北端にある円墳で、明治二十六、七ごろ発掘されたもので、その発見された遺物がわが国考古学界の貴重な資料となったため、早くより学界の注目を受けた。

現存する部分は径一八メートル、高さ一メートルほどの草地となっている。伝えるところによると、竪穴式の石室であつたらしい。付近に積み重ねてある材石に赤色の粉末が塗つてあるのがわかる。

出土した副葬品は、鏡二面、直刀三口、剣一口、銅鈴一個、滑石白玉一個、須恵器若干、その他となっている。鏡二面の中の一つは内行花文鏡で、いま一つは四神四獣鏡で直径一二・五センチ、鏡面の反り〇・四センチ、鏡面は半円角帯の方形内に各一字を造出していたものであるが、現在では「吉」の一字だけが判読できるのみである。また銘帯の全文も不明だが「赤鳥元年五月廿五日」の九字ははっきりとわかる。（赤鳥は呉の大帝の年号・西暦二三八）本邦発見の記年在銘鏡中もつとも古いものに属する。

竪穴式敷石住居跡

三珠町大塚北区薬袋泰光氏の屋敷続きの西側、東南に面する傾斜地の畑地に、縄文時代中期の敷石住居跡がある。

この地は北原古墳群の一角であり、付近一带は縄文、弥生古墳へ続く遺跡の複合地帯である。

この住居跡の発見は昭和四年四月であり、竪穴には板状の石が敷き詰められ床を固めている。しかも屋内には二つの炉が築かれているめずらしいものである。また入口に近い所（屋内）に石棒（信仰の対象）が立ててある。出土品としては、縄文中期の土器片、石斧（打製磨製）たつき石等であつた。



富 く じ

天正十年三月、武田氏攻略のため駿河の国より富士川沿いに徳川家康が入国。表門神社を本陣に定められたことにより御朱印が下され、代々の將軍からも御朱印頂戴、幕府保護下に社頭の修復を行って来たが、幕府時には台所の不如意もあって中々修復金の下げられない時もあった。特に文政のころになると、財政もひっ迫し修復金も蹴られる始末に、別当内膳はそのころ関西で流行し始めた富くじによって修復を思い立ち、当社奉行土井大炊頭に願い出でたところ、文政十二年十一月二十七日御許可をいただいた。

富 く じ

一、一条氏塁跡、三珠町上野にあり、信玄の弟右衛門大夫信龍の城地であった。別に上野城とも呼ぶ。外壁は二級三級の自然の地形をなし、南方は山に寄って民家が点在、北は絶岸、西はゆるやかな丘陵に続く、本丸の頂上に牛頭天王を祭る。馬場、門前、物見塚等の地名も残り、お年寄りには「一条林」と愛称している。古府中塔岩に一条氏の館があった。



一条氏塁跡

一条氏塁跡

一、一条信龍のこと、一条信龍は武田信虎の八男、信玄とは異母兄弟で「甲陽軍鑑」に、甲斐源氏の一門の名族一条氏の名跡を継ぎ、旧一条の庄（甲府市東南部）を支配、信玄の代騎馬百騎を預る侍大将として活躍、永禄十年（一五六七）以降甲軍の副将格で信玄を補佐、天正十年（一五八二）年三月武田滅亡の直前、上野城にたてこもり、駿河路から侵入する徳川家康と戦ったが、子の信就とともに戦死したものと伝えられている。峽南を支配していた穴山信君が、家康の軍門に降っただけに、甲州の防波堤となって守ろうとしたわけだが、「軍鑑」は信龍について「伊達者にして花麗を好む性格なり」と記し、信龍が文武両道に秀でていたことをうかがわせる。



太々神樂

上野や市川辺では「くじ」もあまり多く売れないので、甲府山田町、甲斐奈神社を借りて三カ年間にわたって興行した。

年数度三カ年にわたっての興業だったが、文書によると思わしい成績も上らず、「よって埤ない場所のみ修復仕置候」とあり、その時使用した富くじの箱があり、中には板札、突槍等一切が保管されている。

甲州で富くじを興行したのは他にもう一カ所あるという。以上によって今の宝くじの前身「富くじ」が文政（一八一八—一八二九）のころ町内で発売されたことに意義があるう。

表門神社の太々神樂

社伝によると、太々神樂のはじまりを鎮座以来とし、特に後世、甲斐守に任じ平塩岡に館居した逸見冠者源義清が鎮守として崇敬し、館中に神輿を迎え、神樂を奏して御台所祭を行って以来、毎歳かならずこれを行い社威を隆盛に赴かせたいといひ、甲州でもっとも古い神様であると称されており、また義清の第三子清房は、市川氏の始祖となり、代々この神社に仕え、現宮司市川行房氏はその後裔であるという。始祖清房は源頼朝に愛され、しばしば鎌倉との間を往来しており、そのため太々神樂に鎌倉風の影響があるといひ、さらに永保中、白河天皇の勅願所となった関係から京都とも往来、自ら京風の影響もうけているとも説かれているが、この舞は岩戸開きを中心にした神話を仕組んだいわゆる岩戸神樂であって、かつて二十四座に及んだものがいまはそれが集合されて十三座をかぞえるだけである。

昔は年中祭礼七十五度、そのうち二月初の酉の日十一月初の酉の日をいまでも大神事としている。

それは、義清がはじめて館中に神輿を迎え、神樂を奏したのが酉の日であったことにもとづくものと伝えられ、また四月三日の祭礼には神輿が芦川を渡渉して市川大門町御崎明神の御旅所へ神幸するが、これには神樂衆が供奉し、同所拝殿で神樂を奏することはいまも行われている。



太々神楽

◆舞の構成

- | | |
|-----------|----------|
| 一、扇の舞 | 八、弓の舞 |
| 二、剣の舞 | 九、祝詞の舞 |
| 三、国固の舞 | 十、奉剣鍛造の舞 |
| 四、大海原蛭子の舞 | 十一、酒宴の舞 |
| 五、御崎の舞 | 十二、国乱れの舞 |
| 五、天の岩戸の舞 | 十三、懲魔の舞 |
| 七、大蛇退治の舞 | 十四、終演の舞 |

神楽の舞人はもと砂田大隅はじめ社家神人によって行われ、世々これが承継されてきたものであるが、明治維新後、その退転してのちは氏子がかわり、舞人となる条件としては、各戸長男に限るとされ、いままも別火潔斎して奉任することはかわらない。

神楽には、強弱緩急による誇張した表現はないが、抑揚悠々、典雅な奏楽のまにまにそれぞれの衣裳と面をつけ、一切無言、鈴並に各種の取物を以って手振、身振によって神に奉任する真心を以って優雅、莊重に演舞し時に勇壯闊達なものもあり、またいわゆる段物として諧謔、飄逸のものもある。

奏楽は七種類を数え、主として太鼓、編太鼓、笛を用い、面の現存するもの二十四種類に及ぶが、それに伴う舞技、奏楽の全部を伝えるものなく、現今はその三分の二を演ずにすぎない。



石 祠



大塚邑水路新造碑および代官中井清太夫生祠



生 祠

大塚邑水路新造碑および

代官中井清太夫生祠

昔から大塚河原は大雨の降るたび、笛吹川の水位が上がり、悪水路の水は逆行して田圃は水没するという憂き目をみてきた。このため甲府代官として着任した中井清太夫にお願いし、天明六年から天明七年春にかけて悪水路の大改修が行われた。このため村の指導者らにより甲府代官退任後の寛政九年に建碑された。

石祠らは高さ一四七cm(台とも)正面三五cm、奥行三二cmの角柱で上部が欠落している。又生祠は高さ一〇〇cm、正面四八・五cm、奥行七五cmである。

この碑と生祠は従来押出川右岸の七年の上の排水渠を見下ろすところに建てられていたが、現在は県営大塚排水機場の北隅に移されており「お水神さん」として現在もお地域住民に祀られている。



大ケヤキ

大ケヤキ

樹齢不詳 根本周囲八、八メートル 目通り四、八メートル 樹高二〇メートル

樹盛は旺盛である。

巨木、古木にして、古くより「皿吊るしの櫓」として地域住民に親しまれてきた。

地域住民の方の話によると、双幹の巨木であったが昭和二十二年頃の風水害の際、主幹の片方が根本近くで折れてしまった。

樹齢は不詳であるが、よく風水害に耐えた古木である。そばに新羅三郎義光を祀ったと伝えられる義光明神の石祠がある。

石祠には、「きく神さん」とも呼ばれるが、「きく」という語から耳の神様として信仰されるようになり、耳の悪い人は皿に穴をあけて、その穴に縄を通し、大ケヤキに吊して耳が良くなるよう折ったものだという。

このことから、この大ケヤキが「皿吊るしの櫓」と呼ばれるようになったのである。

三 珠 町 文 化 財 一 覧 表

県指定 No	種 別	名 称	所 在 地	所 在 者	指定年月日	地区 番号
1	建造物	表門神社の石鳥居	上野2767	表門神社	昭46.4.8	1
2	天然 記念物	一瀬桑の親株	上野33	一瀬益長	昭44.4.17	2
3	〃	薬王寺のオハツキ イチョウの雄株	上野199	薬王寺	平3.5.30	3
4	〃	表門神社のコツブガヤ	上野2767	表門神社	平3.5.30	4
5	史 跡	大 塚 古 墳	大塚	大 塚 区	平9.4.	5
6	考古資料	大塚古墳出土資料一括七三九点	大塚	三 珠 町	平9.4.	6
町指定 1	建造物	表門神社本殿	上野	表門神社	昭44.4.17	7
2	〃	表門神社神楽殿	上野	表門神社	〃	8
3	〃	「薬王寺」八ノ宮御座所	上野199	薬王寺	〃	9
4	〃	光勝寺の仁王門	上野4308	光勝寺	平2.10.22	10
5	〃	南村の宝篋印塔	上野4277	長昌院	平3.3.5	11
6	彫 刻	熊野神社の狛犬	上野4277	熊野神社	昭44.4.17	12
7	〃	千手観世音菩薩像	上野4308	光勝寺	平2.10.22	13
8	〃	不動明王像	上野4308	光勝寺	〃	14
9	〃	毘沙門天王像	上野4308	光勝寺	〃	15
10	〃	十二神将像	上野1121	禅昌寺	平3.3.5	16
11	〃	薬師瑠璃光如来像	上野1121	禅昌寺	〃	17
12	〃	日光菩薩像	上野1121	禅昌寺	〃	18
13	〃	月光菩薩像	上野1121	禅昌寺	〃	19
14	絵 画	文 珠 画 像	上野792	市川行房	昭44.4.17	20
15	〃	八ノ宮遺物の絵馬	上野199	薬王寺	〃	21
16	〃	絵 卷 物	上野185	土屋徳義	〃	22
17	〃	大塚村絵図	大塚4295	塩島博光	平3.3.5	23

三 珠 町 文 化 財 一 覧 表

町指定 No	種 別	名 称	所 在 地	所 在 者	指定年月日	地図 番号
18	書 籍	御 朱 印 状 写	高萩	高 萩 区	昭44.4.17	24
19	工 芸	八ノ宮遺品の硯	上野199	薬 王 寺	〃	25
20	考古資料	考 古 資 料	大塚	三 珠 町	昭44.4.24	26
21	史 跡	内藤肥前の守墓	高萩	内 藤 賢	昭44.4.17	27
22	〃	伊 勢 塚 古 墳	大塚	大 塚 区	昭44.4.17	28
23	〃	エ モ ン 塚 古 墳	大塚	笠 井 金十郎	昭44.4.24	29
24	〃	狐 塚 古 墳	大塚上ノ原	塩島甚五左衛門	昭51.6.19	30
25	〃	竪穴式敷石住居跡	大塚上ノ原	薬 袋 泰 光	昭44.4.24	31
26	〃	一 条 氏 墓 跡	上野	蹴 裂 神 社	昭51.6.19	32
27	〃	大塚邑水路新道碑および代官中井清太夫生祠	大塚1061-8	三 珠 町	昭62.3.31	33
28	民族資料	富 く じ	上野792	市 川 行 房	昭44.4.17	34
29	無 形	表門神社の太々神楽	上野2767	表 門 神 社	昭44.4.17	35
30	天 然 記念物	大 ケ ヤ キ	上野2327	三 珠 町	平9.1.27	36

昭和59年3月31日初版発行
昭和62年3月再版
平成3年9月改版
平成9年3月改版

三珠町の文化財

発行 三珠町教育委員会
執筆 三珠町文化財審議委員会
編集 三珠町教育委員会事務局
印刷所 (株) 有泉堂

西八代郡三珠町位置図



三珠町全図

